

「排隊」現象から観察した中国社会

The Chinese Society Observed from the People's Phenomenon of “Pai dui”, Forming a Queue

細井和彦*

Kazuhiko HOSOI

要 旨

小論は「排隊（列を作って並ぶ行為）」をキーワードとして中国社会と中国人の特徴を分析しようとする試みである。「排隊」自体は日本でもごく普通に見かける光景である。けれども、日中両国では「排隊」する動機は相似していたとしても、方法や背景は大いに異なる。そのことを理解するために、最初に「排隊」の具体例を列挙した。次に現象の背景を簡潔に分析した。最後に、日中両国の社会構造を構成する文化要素を取り出して整理した。隣国で歴史的文化的背景も長く深い両国間の文化的相違を認識することで、より一層の相互理解を生み出す一助になればと考えている。

キーワード：排隊 面子 欲望 関係 公私

はじめに

本稿のテーマだけを見ると、中国には「排隊 (Pai dui)」現象なるものが存在している（もしくは過去に存在した）、何かの社会現象を引き起こしている（いた）かのような誤解を招くかもしれない。そこで、このテーマにいくつかの語彙を補足して誤解を解消しておきたい。かりに「排隊」という現象をキーワードにして中国社会を観察してみると、中国人や中国社会は我々日本人にとって、どのように見えるのだろうか、試みに探ってみよ

*本学教授、中国近現代史 (Modern China History)

う（下線部が補足語彙）となる。題目としては長すぎるが、本論の論点を正確に表現していると言える¹⁾。

本稿のキーワードは中国語の「排隊」である。意味は「列を作って並ぶという行為」である。一般に人間は「ある特定の具体的な目的（目標）を達成もしくは実現することによって、個人（集団）の欲望を満足させるために」排隊するのである。例えば、人気のある新商品が発売される時や有名店の前には行列ができる。徹夜をして並ぶことも珍しい現象ではない。最近では人気商品は発売前にインターネットで予約するのが常識になりつつあるから、ニュース映像の行列も正月の初詣や福袋購入などに年に数回しか見られなくなってしまった。ところが、中国人の「排隊」と日本人の「行列すること」とは、見た目も内容も大きく異なる。国も風土も歴史と文化も違うのだから、当然と言えば当然なのであるが、日本人は自分たちと中国人とは同じであると誤解することが多い²⁾。「排隊」という現象を通じて、中国社会と中国人の行動様式（すなわち生活文化の形態のこと）を解釈しようとする試みである。

文化や習慣は長い年月をかけて、歴史的に蓄積されてきたものである。ゆえに分析の手法としては、歴史学の実証主義が有効になる。歴史学は文献（史料）中心ではあるが、本人の経験したことや体験したことが事実を認定する分析（史料批判）には必要となる学問であり、人間中心主義であるから、主人公は集団であれ、個人であれ人が基本であることに変わりはない。

また、本稿で登場するほとんどの事例がこれまで執筆者の経験体験したローカル情報に基づくものであるから、きわめて体験談的である。体験的要素から出発してそれらを検証して学術的解釈しようとするのである。第一章では「排隊」にまつわる事例を列挙し、それらの事例を分類して分析、解釈を加えるのが第二章である。第三章では、先行研究の成果を参照しながら事例の分析を通じて得られた事柄を再解釈して、中国社会を理解するための鍵となる要素を導き出したいと思う。

1. 排隊から発生する現象（行為・行動）

本章では「排隊」の事例を列挙する。なおすべての事例は、筆者のほぼ初体験時の状況をできる限り正確に再現しようとした。事例の中には、その後も複数回体験しているものもあるが、事例中でいちいち断らないことにした。

ケース1： 並ばない（列を成さないこと）

南京に留学中の出来事である。1988年の冬、宿泊先の上海音楽学院から上海淮海中路に出て、南京路方面行きのバスを待っているときに驚くべき状況に出くわした。私は誰もいないバス停で先頭に並んでいるつもりだった。だが、待っているうちに徐々に人が集まってきて、中国ではまだ一般的な二両編成の連結バスが来たときには、乗車口に我先にと乗り込もうとする人民が殺到していた。私がただただひたすらあつけにとられているうちに、満員のバスはすでに発車していた。バス停には乗れずに取り残された私が一人ポツンと立っているだけだった。このときには中国人は順番に並ぶという習慣がないのかと思った。

ケース2： 割り込み・横入り（列に割り込むこと・横入りをすること）

1989年春先、上海駅で南京行き列車の切符を買うために窓口で並んでいた。列は行列を乱すことを防止するために、鉄の柵で区切られていた。並んで30分弱が過ぎた頃、列の前方に二人の若い男が柵を乗り越えて割り込んだ。周囲の人々と殴り合いの喧嘩になりそうなほど言い争いになったが、二人はそのまま居座った。並んでいた人々も最初は二人に文句を言っていたのだが、しばらくすると彼らの行為に納得したかのように見えた。つまり、割り込みという行為はみんながやっているということで、別の場所では、割り込まれた自分も、割り込む自分にと立場を変えるから二人の行為を許容したのだろうかと考えた。

ケース2：付随事例

1. 後日、上海駅では別の場所で外国人専用（中国人でも地位やお金を持っている人物であれば利用可能）に切符を販売してくれる窓口があることを学習した。これ以後、特に遠方に出かける旅行においては、外国人である特権を利用するようになった³⁾。90年代初期の当時は観光地で入場券を買うときは、外国人料金なるものが設定されており、中国銀行が発券する外国人専用のお金（FOREIGN EXCHANGE CERTIFICATE、外匯兌換券、FECと言う⁴⁾）が存在していた。北京や上海という外国人が多く訪れる主要都市には友誼商店があり、そこでは兌換券の使用が義務づけられていた。外国人が宿泊可能なホテルでもそうだった。一般の商店では購入不可能な品物が多く購入可能だったので、中国人も何らかの方法で兌換券を入手して、友誼商店で買い物をするのが一つのステータスだった。ゆえに兌換券の価値は人民元よりも高く、通常1.3倍から2.0倍の交換価値で変動していた（89

～90年の見聞に基づく)。経済発展のために中国政府が外貨を貯める方法を外国人頼みにしていた時期である。

2. 昨年8月に上海万博に行った。異常な熱波のなか、会場でドイツのパビリオンに入場するために並んでいた。2時間半待ってもうすぐ入館できるという時、中国人4人が鉄の柵を乗り越えて突然、割り込んできた。周囲の人々から一斉に非難と怒号の声が上がった。そして横入りの不届き者たちは会場警備員につまみ出され、ひどくお説教されていた。周囲の観客は歓声を上げ、ふたたび列は炎天下の下、入場を待つ姿に戻った⁵⁾。

ケース3 並び方の特徴 密着（対人距離が短いこと）

1988年の年末に近い12月のある日の夕刻、南京大学の正門横の肉まん店で並んでいるときのことである。実は肉まんではなく、野菜まんが人気商品のお店だったので、自分で買って食べるために並んでいた。場所がら、お客の9割以上は南大の学生と大学関係者がほとんどの店だった。列に並んでからしばらくしたとき、すぐ後ろに並んでいた男子大学生の呼気（息）が耳元にあたった。びっくりして振り返った。振り返ったときに男子学生だと気がついた。一度ならずとも二度も同じように耳元に息を吹きかけられた。何か変な気があるのだろうかと思ひ、背筋が寒くなった。どうも故意ではないらしいと気がついたのは、同様な体験をしてしばらくたってからのことだった。また横入り防止のために前に並ぶ人との距離をつめて並んでいるのかと思っていたが、どうもそうではないらしいとわかったのは後のことだった。

ケース4 飛び越し（なんらかの手段で、列そのものを飛び越すこと）

1. 正攻法：日本人としては規則に乗っ取っていると絶対に思うが、中国人にとっては合法（あたりまえ）だということ。

2006年北京滞在中、日中友好病院の「国際受診受付窓口」を利用して診察を受けた。「国際受診受付」窓口と言っても、外国人専用受診受付ではない。実際は利用できる中国人も利用している。この窓口は診察予約が必要で、かつ有料である。中国では国の制度としての医療保険制度は未整備である。ただ個人が保険会社の医療保健に加入すれば、診療後に保険会社に保険金支払いを申請し、それが受領されてはじめて医療費が保険率に合わせて還付される。こうした仕組みになっている⁶⁾。つまり「お金」があれば、早朝から並んで順番を待たなくても、綺麗な待合室で待つことができるし、事前予約の仕組みもあり、混

雑して精神的にイライラしないという優良な環境下で診察を受けることが可能となるわけである。

2. 裏の手を利用する方法：「こね（関係）」を使い、裏口から入ること。

日本でもしばしば報道されているパターンの一例を紹介したい。ただし特異な例ではある。中国人友人との会話のなかで出た話であるが、彼が生活習慣病の疑いがあり、眼科を受診した際、友人に頼んで評判の良い腕の立つ医師を紹介してもらった。その日も、一般人民は受診予約して列をつくっていた。ところが、彼は列に並ぶこともなく、別室で医師の受診を受けていた。とそのとき、医師に呼び出しの電話が入ると、急患だからしばらく待つようにとだけ言い残して、すぐに部屋を出ていった。別の急患を診察するために友人の彼の診察は中断された。急患と言っても、ここでの急患は我々が想像する急患とは異なる。彼より大きな「こね（関係）」を持った急患が医師の診察を受けに来たのだった。

ケース5 並べない・並ぶ資格を持たない人民の存在

ケース4を利用することが不可能な人民が存在するということである。簡単に言えば、列に並ぶ権利すら保有しない人民のことを指す。周知のように、現在の中国社会は貧富の差が激しい格差社会である。まずお金を持っていない（没銭、貧困とも表現可能）ので、列に並んでも仕方がないのだ。列から離れてあきらめている場合だという解釈も可能である。

ケース6 何かを主張するために並んで行列を作ること デモという隊列のこと

中国でデモと言えば反日デモが記憶に新しい。だが、もっと自由なデモができる環境がそれほど遠くない過去の中国にはあった。1989年の天安門事件時にデモに参加した体験から感じたことである。南京大学でも4月中旬から授業ボイコットが流行したため授業はなくなり、天安門広場の学生運動に連携して毎日デモ行進した。デモ情報は正門近くの掲示板に掲示された。我々留学生たちも参加した。ただついて行っただけという表現の方が適切かもしれない。デモ隊自身には実力行使されるかもしれないなどという緊張感はまったく感じられなかった。デモへの参加人数は日々増加していった。鼓楼広場まで行くと、南京市内だけでなく南京近郊の大学までもが参加のためにやってきていた。市中心に向かってゆるやかに隊列が進み、スローガンは五・四時期の「民主と科学」、特に「民主」を要求するものだった。5月20日、北京に戒厳令が發布されて以後、デモ隊のスローガン

は政治色を帯びるようになった。市内でも一車線を占領していたが、市民は学生に暖かく、手を振り支援の意を表すだけでなく、飲料水と食料（肉まんなど）を提供する者もいた。もちろん警察は交通整理に熱心なだけで、何の取り締まりもなかった。

2. 現象事例の分析

以下、本章では第一章で提示した事例の分析を行う。

ケース1：欲望の自己実現例1

ケース2：欲望の自己実現例2

ケース1と2は自己の目的を達成するために、手っ取り早く欲望のままに行動して自己顕示するパターンである。中国社会は自己実現するためには、競争相手以上に自己の欲望を全面に押し出さなければならない。日本でも根本理論は同様であるが、中国社会においては日本では欲望を使用せずともある一定のルールに従えば実現可能な場合であっても、欲望を使わなければならない。

また、欲望を実現させるための別の方法（ルート）が存在する。有料の場合がほとんどであるが。たとえば、外国人専用の兌換券（もしくは外貨そのもの）を人民元に両替する組織的な集団が多数存在した。いわば、闇の通貨交換市場である。ケース2の付随事例1にもあるように、兌換券でなければ購入不可能な外国製品があるので、購入したいという欲望（意欲）を持つ人々はそれを手に入れるために努力することになる。90年代早期には、ほかにもまだ配給制度も存在しており、全国（地方）「糧票」などの配給券がなければ購入できない日用必需品・嗜好品があった。日本ではごく普通に全国どこでも入手できた砂糖は、89年当時、南京ではまだ配給品扱いだったし、西安ではざらざらしたコーヒージュガーのような砂糖しか手に入らなかった。どうしても必要な場合は、親戚や友人に頼んで北京から買って来てもらっていたという（西安に砂糖を届けるという行為を奇異に感じた筆者が友人に尋ねた見聞）。

最近では、日本人のように「排隊」する行為は中国社会に受容されつつあるようである。

ケース2付随事例2で述べたように、上海万博ではみなちゃんと列を作らされて並んでいた。おおいに変化したと言える。ただし、車いす・ベビーカーに乗った観客は優先入り口から優先的にパビリオンに入場可能だったので、これを利用するために万博会場では「偽

障害者」や「大きな赤ちゃん」が誕生した。車いすとベビーカーの貸し出し場では争奪戦が繰り広げられているのを目撃してしまい、非常に落胆した。欲望は人間個人個人の心の中にひそんでいるが、それがどのようなケースでどこに向かって発露されるのかが大きな問題になる。

日本人は欲望を節制することが美德である社会を作り上げた。他人の眼を気にするし、他人に迷惑をかけないようにすることを優先する社会だ。ただし、中国人からすれば日本で働いている中国の友人たちのように日本社会に入ったとき、息が詰まる、ストレスを感じるという言葉をつたえられた。リフレッシュのために、一年に一度は帰郷する友人も多い。友人たちはみな知日派であり、日本人とこの社会をよく理解しているのであるが。筆者は日本人であるが、中国社会にいるときには自己中心的な雰囲気にとっても溶け込む。人目を気にしない社会の雰囲気はとて精神的な開放感を感じざるをえない⁷⁾。ゆえに、この点はどちらが優れているという観点では正確性を欠く。それぞれの社会的特徴はそれぞれの文化的歴史的な展開に規定されているからである。

ケース3：対人距離が日本人に比べて「短」距離

中国人の対人距離は日本人に比べて短い。このことを知らない日本人ならば、女性であろうと男性に接触してくるよう感じられるから、何か別の目的があるのではないかと誤解することもあるかもしれない。「排隊」時には、割り込みと横入り防止のために密着して並ぶと考えられるが、どうもそれは結果論のようである。むしろ自己の権利（目的）を保持して自己実現して欲望に到達するためだと考えられる。つまり本来的に中国人は対人距離感が日本人よりも短いのである。日本人の対人距離感はその人との親密さを表現するだけだが、中国人は未知の人に対しても対人距離が短いのが特徴である。しかしながら、中国人でも既知の間柄になると対人距離がグンと縮むから、両国人とも対人距離は親密度をはかる目安（基準）と言えるのではないか。この点は外面（行動様式）だけではなく、内面（心理状態）についても同様のことが言える。

ケース4：「こね（関係）」の使用と利用

「こね」はコネクションとも言える。中国では「関係」と言われる。自己の欲望を実現するために使用される自己が保有する人的資源と定義することができる。日本社会にも「こね」のあるなしでは、随分と就職等人生の岐路における処遇に差が出るのもじばしばであるが、中国社会は対人関係の輪がなくてはならないから、「関係」の有り無しが場合によっては、「生死」を決する。日本とは比較にならないほど、重要なのだ。対人関係の輪が

広ければ広いほど、より多くの「関係」を所有していることになり、法律以上の役割を果たす。「関係」はまた権力と密接に結びつき、欲望を実現させるための潤滑油にもなっている。

このケースから、「大きなこね」（権力との結びつきが強大）と「小さなこね」（権力との結びつきが弱小）とがあることが理解できる。「関係」に大小があるのだ。これはケース3の対人関係の距離感と関連性がある。一般的に、距離が近ければ「関係」は大きく、逆は小さくなる。対象者との親密度と同じである。もちろん、「関係」を必要とする者が同時に同じ目的を達成しようとして「関係」を使用しようとした場合、大きな方が優先される。

ケース5：欲望実現する資源がない人民の存在を証明

中国では、貧富の格差が生まれており社会問題化している。口で言われても実感できないが、日本人が考える以上に格差は大きい。

20世紀以後、孫文の「耕す者に田畑を」のスローガンから中国共産党による土地改革まで農村の土地分配と自作農を生み出す政策が実施されてきた。今ではこれに戸口（戸籍のこと）問題と農民の出稼ぎ現象が絡み合い、都市と農村の格差是正の必要性が叫ばれている。

「カネ」も「こね」もないので、自己の権利を実現できない。実現できなければ、生命が危険にさらされる場合もある。実現できないことは、社会的に孤立することになる。不遇の人民の数が増え続けると、しまいには集団化して自己防衛をはかるようになる。これは政権側として一番の恐怖である。事態の進み具合によっては社会不安の醸造源になるからだ。

1980年代の改革開放初期はまだみな平等の権利を保有していた。「万元戸」に象徴されるように、農民が豊かになれるように政策を実施して成功した。だが産業構造を変化させることができなかったので、農業従事人口が減少せず、農民工として不安定な生活を強いられている。農民工にもなれない農民はもっとも悲慘な生活を強いられている。我々日本人は都市生活市民からの視線しかないので、本当の現状を知らないし、日本の田舎はとてものどかだから中国の農村の厳しい現状を知らなければ、判断を誤ることもある。現在では農村の荒廃が問題、三農問題（農村・農業・農民）として解決策が模索されている。西部大開発も東西の経済、所得格差が大きくなりすぎた事から不平等を解消するために実施しはじめた。

総じて、農民は、歴史的に見ても、権力者に利用されるという側面が大きいのである。

ケース6：権利の主張のための集団的（自衛）行為

デモというのは、別に近代の産物ではない。ここでは、古来より、経済的権利から政治的権利まで、権力者に対して異議申し立てをする際の手法の一つであると考えられる。デモをする側は、権利、言い換えれば自己実現のための主張を権力者に認めさせるのを目的とする。対する権力者は、デモ隊（集団）が主張する権利を認めるかどうか、自己の権力と抵触しないかどうかを選択し、デモ隊に対処する方策を練るわけである。

中華文明では文が優先され武は否定されるから、できるだけ暴力を使用したくはないはずである。しかながら、権威を口実にして武が発動されてきた。だから、暴力的に解決を図ろうとすれば必ず双方の衝突が発生した。デモ隊の側はできるだけ慎重になり、権力者の虎の尾を踏まないようにしなければいけないのだが、この事例の場合は1989年4月から5月にかけて、国の顔である天安門広場を占拠し続け、ゴルバチョフとの会談を台無しにして鄧小平という陰の最高実力者の面子をつぶしてしまった。これが大きな惨劇を招く結果になったのではないかと思う。

3. 中国社会を成立させている根源的な文化要素

本章では、中国社会のキーワードとなる文化要素をピックアップして、事例分析によって得られた知見をさらに総合化してみたい。果たして、対人距離感覚、「関係（こね）」を利用した自己実現の方法からどのような中国人の人間関係を規定する要素が特定されるであろうか。

まずはじめに、中国社会は人間関係が最も重要な要素である。複雑で濃密な人間関係である。中国人は対人「距離」で人間関係の親疎を計っている。「内人（身内・内部の人）」と「外人（知らない人・未知の人・部外者）」の間には飛び越すことのできない溝が存在している。中国人が持っているのは、身内と見知らぬ人を境界線を引いて区別する観念である。身内を大事にする考え方からすれば、90年代の外国人料金の設置もこの一例ではないかと考えられる。

中国人との交際が始まると「朋友」になる。普通の友人関係を結ぶことになるが、この段階でもすでに日本人よりも情熱的である。つきあいが長くなるにつれて、普通の友人からいい友達「好友人」になり、最後に「老朋友」になる。古くから「関係」がある親しい友人のことである。こうなると「内人」の「関係」になる。筆者の経験からしても、この

段階になればそれまで不可能だったことがいともたやすく実現できるようになる。ただし、「内人」になると、相手側からの要求もグレードアップされる。日本人のようにいつまでも「お客さん」気分であることはできなくなる。

つまり、特徴をまとめておくところなるだろう。

①中国人は対人関係を対人距離の遠近で判断し、「内人」と「外人」とで区別している。

②「内人」と「外人」の間には境界線が存在する。

③その境界線は常に変化するから、「外人」から「内人」に認定されることも可能である。

④「内人」と認められると機能する各種の要素が存在する。最初に「情（チン・qing）」が働くようになる。これにより、相手から好意、なさげ、よしみ、恩義等を受けることができる。双方に「感情（ガンチン・ganqing）」が生まれる。精神的に友情や親しみを感じることができる。また「人情（レンチン・renqing）」を持つようになる。人情、好意、私情、縁故である。交際には「情面（チンミィエン・qingmian）」が必要になる。情実、内情、よしみ、相手の顔をたてること等である。身内になったからには交際相手に対して「交情（ジアオチン・jiaoqing）」、交際している相手に対する親しみの情のことで、よしみ、友情、交誼のことを、常に意識するようになるのである。このように一言で情と言っても単なる親しみや憐れみといった抽象的な感情ではなく、「関係」を結んだ相手に対する双方向的な具体的実体的な感情なのである。

次に、重要なのが「面子（メンツ・mianzi）」である。まずは自分の、そして交際する相手の面子をどのようにして大きくするのが交際のポイントになる。面子は人間関係を規定する文化要素の一つで、千変万化する。「面子」はもらったり、たてたり、あげたり、わたしたりできる。日本人よりも中国人は「面子」を重んじる場合が圧倒的に多いし、なくしたり（失ったり）することもある。もしも相手の「面子」をつぶすようなことになると一大事であるし、つぶされると名誉を傷つけられる。「面子」は人生の賭をするときには、虚々実々にみせかけることもできる。「面子」は権力と結びついた欲望実現のための機能であるがゆえに、経済的利益（報酬）の移動（やりとり）がある。金品・社会的地位が介在する意味あいを強く持っている。

中国人の面子が日本人のそれとは大きく異なることを、内山完造が非常にわかりやすく説明してくれている。しばし内山の意見に耳を傾けてみよう⁸⁾。「儲かるとか損とかの問題ではないのだ。男の顔がたたんではないか。…」という言い回しが日本では普通である。「日本の顔（面子のこと―筆者補足）は実利とか実益とかいうものから離れるところに重大なる意義ある」のが日本人の面子だと述べている。逆に中国の面子は実利と実益があり、またそれらの大小が重さと軽さを決めるものだと言っている。さらに、普遍的な面子の意味として、「らしい」、「らしくあること」が根本にあると指摘して、「とにかく、誰でも

が、らしい行動をし、らしく行動すれば有面子（面子が保たれること＝筆者補足）であると結論づけている。

一例を挙げよう。今年7月23日に温州で中国の高速鉄道事故が発生、40人が命を落とした。この原因は究明中であるが、開業を急ぐあまりに準備不足でずさんな運行をしていたと国内外のメディアから指摘された。安全より面子を優先したのではないかと報道された⁹⁾。報道では中国政府・鉄道省・中国共産党の「面子」について述べているだけだが、高速鉄道の開通と乗車は一般市民である老百姓の「面子」も満たしたのである。「これまで来日するしか乗るすべがなかった新幹線に、今や自国で乗ることかできる上、最高速度と営業距離はもう日本よりうえだ」という中国人としての誇りである。だがそれが潰されたわけである。ショックは甚大だったにちがいない。党と政府は失った「面子」の巨さに驚き、温家宝首相がすぐに現地入りして現場会見を開き、これ以上諸外国から「面子」を失わないようにしたのである。損失を最小限にとどめるためにすぐに営業を再開したのも、「面子」を損なわないようにしたからである。市民の「面子」も潰されたが、ガス抜きにネットでつぶやく自由を得て少し「面子」は回復した。

では再度、「関係（グアンシ・guanxi）」について論じよう。前述のように、「関係」とはいわゆる「こね」のことである。人に取り入り私利を目的として作られる個人対個人、単位〔集団・団体・企業組織〕とのある種の結びつきで、中国社会ではネットワーク化していて、「面子」を潤滑に機能させるためには必須の文化要素なのである。

中国社会は日本社会よりも欲望を肯定する社会であり、欲望が社会発展の原動力になっている。競争は悪ではなく是とされる社会である。それゆえに、孔子は競争を規制したのではないだろうか。中国の歴代王朝は抑商政策を実行して農本主義政策を貫いた。これは自由競争を制限する管理干渉政策にほかならない。土地に農民を固定して移動の自由を奪い、土地と人から徴税したのである。

一方、「大国を治むるは小鮮を煮るが若し」（『老子』居位章）と言ったのは老子である。料理の秘訣で政治の極意を説いた言説として誠に有名である。老子は無為自然こそが理想だと主張した。何もせずにそのままであることが最上だと言うのである。大国統治の理想的方法は、箸でかきまじりせず小魚（鯛や小鰻、白魚、イカナゴ等）を煮るように鍋をやさしくゆすってじっくりとろ火で煮ればよいという意味である。老子は大国統治の方法を管理と干渉をせずに放任（まかせる）すべきであるとしたのである。そうすれば治まるように治まっていくだろうと言いたかったのだ。あれこれと細かく統制したりしないことが最良の大国（中国を指す）統治の方法なのである。この主張は孔子の方法とは対局的である。とすれば老子の考えは現代的に言えば自由主義的であり、競争を肯定している。

老子の考え方は中国社会の姿をそのまま生かそうとしている。一方で孔子の考え方は中国社会の特徴を理解した上で、無政府状態をもたらさずであろう自由放任主義を否定し、中

国人を社会化して社会機能を維持するために必要な最低限の文化要素を加えた。それが「徳」や「孝」の概念である。孔子は自由放任主義では中国社会は機能不全に陥ると結論づけたので、管理統制政策の実施に傾いたのである。このように考えられはしないだろうか。

中国の歴史を遡ると、唐王朝までは畑作中心の農本主義でやっていけたが、宋王朝から経済の中心が長江以南の江南地域に移動した。モンゴル帝国を経て現在に至るまで、上海から広州までの南の経済力が中国の成長を促進してきた。北京は政治の中心として存在し続けており、南北で政治経済を分業している型である。転換点は宋からモンゴル帝国（元王朝）の時代である。モンゴル帝国は重商主義政策を採用し、ユーラシア大陸と大洋をつないだ。銀の世界貨幣化にして東西交渉を活性化させ、物流ネットワークを形成した。重商主義的政策は中国社会に貨幣経済が根付く契機を与えたが、重農主義の伝統とは相克していた。残念ながらすぐに揺れ戻しが来て、モンゴル帝国は瓦解してしまった。しかし人間は一度、組み入れられた経験があれば決して後戻りはしない。明から清王朝にかけて税の銀納化が進み、遠隔地商業が発達し、商人グループが形成された。貨幣経済・商業の拡大の流れは強まった。朝貢冊封という枠組みの中で、海外との貿易も行われていた。

そしてもう一つの競争があった。皇帝による一元的な統治体制を支えた科挙官僚である。科挙は競争を前提としており、一部の限定的な職業、前科の有無以外、身分差別は基本的に存在しなかったから、受験志願制限はなく、万人に公平に開かれていた。競争はあくまで決められた既存の「枠組み」の中における競争だったので、公権力の管理統制の枠組みからはみ出すことはなかった。

次は、欲望の発露を日中両国間で比較してみたい。

中国社会は欲望があることを内面に隠さないで生きることのできる社会、つまり欲望をストレートに発現する社会である。日本は反対に何事もオブラートにくるんで包み隠す社会だから、「包装社会」と言える。最近では節約のために過剰包装を省略する風潮にあるが、それでも日本人の包装技術は丁寧で美しい。一方の中国では商品を包装してくれるサービスは存在しなかったが、現在は一部にはあるが日本と比べるとまだまだ技術的に劣る。この日本人の特徴の方が世界的に見ると特殊なようだ。日本は自己の欲望を制御することで社会が円滑化され他人への思いやりが生まれるが、中国は欲望を出さなければ何も必要としていないとして普通の社会生活を送りにくいのである。

では、自己の欲望はどの範囲において制限されたり、自重したりするのだろうか。どの社会でも「公」の部分と「私」の部分が存在するが、両国では「公」と「私」の及ぶ範囲にも相違がある。個人的欲望の実現とか、面子には実利が伴うという説明をしてきた以上、中国でもしばしば重大犯罪事件に発展している収賄に深く関わりがある「公私」の概念について最後にまとめておきたい。

まずは身近な光景から考えはじめてみよう。例えば、井戸端会議は日本の習慣である。今でもご近所の主婦が数人集まり立ち話をしながら、噂話や世間話に花を咲かせている光景を見かけるのは珍しくない。中国の友人はこの光景を見ると、なぜ道端で延々と立ったまま話し続けるのか、どうして家に入り座って談笑しないのか、日本人は何と礼儀がないと感じるようだ。日本人の自宅に訪問するには事前に日時を詳細に尋ねなければならない、なんと面倒なんだと別の中国人の友人は言っていた¹⁰⁾。

中国の友人の戸惑いの背後には日中の習慣の相違が存在する。たとえ食事どきでも不意の訪問者も客として遇するのが中国人なのである。それに対して、家の中を綺麗に掃除をしてご馳走を準備してからお客さんを迎えるのが日本人の習慣である。形を整えてから物事を実行に移すのが日本人の行動様式である。家の中は完全に「私」の範囲であり、ある条件がクリアされなければ他人には容易に開放しない¹¹⁾。比べると中国社会では計画よりも先に行動が優先し、行動の結果で計画を適宜に修正するようだ。そして「私」と解釈される範囲が日本社会よりも広いのである。

それではどこまでが「公」の領域で、どこからが「私」のそれなのだろうか。日本人と「敷居」の考え方について説明する。

伝統的な日本建築には構造上「敷居」が備わっていた。現在の住宅はバリアフリーが普及したので、「敷居」はなくなりつつあるが概念としてはまだ健在である。日本人の場合は敷居をまたぐまでは家の中であって「私」の範囲であるが、「敷居」をまたいでしまえば「公」の範囲になる。「敷居」が公私の境界線である。「敷居が高い」（不義理や面目がないことをしてその人の家へ行きにくい）、「敷居をまたぐ」（その家に入る。その家に入りする）「敷居越し」（敷居を隔てて、相手に何かをすること。わずかな距離であること）等々、日常的によく使う言葉の中に、「敷居」が登場する。これもまた日本人が「敷居」でもって「公」と「私」の境界線としている証左ではないだろうか。

一方で、中国の場合は「公」と「私」との境界画定が日本社会と比べて曖昧だから、結果的に「私」の範囲が拡大する。一例を挙げよう。90年代初期に友人に案内され西安を一日観光したときのことである。友人の父親は国営企業の工場長で、工場長専用の公用車があった。友人はその運転手付きの公用車を利用して、私を観光案内してくれたのである。当時はまだ自家用車を保有する人間など皆無に等しかったから、公官庁、公営企業の幹部は公用車を自家用車代わりに使用していた。この利用法は日本人からすれば規則違反、職権乱用である。しかしながら、中国では現在でも公用車はほとんど自家用車と同様に等しく利用できる。

さらに「内人（身内）関係」になると、日本人感覚からすれば「敷居」をまたいでずかずかと「私」の範囲に入り込まれるようになる可能性もある。中国人は歴史的に南方人と北方人に大別できる。北方人の方が自己犠牲の精神が豊富で、「内人」や「老朋友」に

対する多大な配慮は「損得抜き」でやる。南方人はどちらかと言えば、商人的打算的であるが、「ドライ」という意味ではなく「自分に利益があるかどうかで判断」し、理性的な行動をとる。中国社会は「関係」の親疎で「公私」の境界線が移動するのである。ここにおいて、「親しき仲には礼儀なし（不要）」の公式が成立するわけである。

おわりに

以上述べてきたことから、中国社会を構成している重要な要素をまとめておきたい。

第一に、中国人は人間関係の親疎を距離で計るから、日本人の人間関係よりも直接的で、わかりやすい人間関係である反面、日本人にはあまりにもあからさまな自己主張と欲望への熱が見えてしまう。逆に中国人から見たら日本人の敷居の中に入り込むことは非常に困難で、ストレスを感じる。

第二に中国社会は常に「面子」のやりとりが行われている。中国人の「面子」は実利が伴い、やりとりには物質的価値の大小が付加される。

第三に中国は「関係」社会である。個人間の「関係」の有無、親疎が一つ一つ絡み合い、相対として社会が構成されている。「関係」社会の中で、毎日大小の大きさの「面子」がやりとりされているのである。

日本人にとってオブラートにくるまれない欲望が全面に出てくる中国社会は強烈である。しかしながら、中国人は日本人の隣人だから付き合わないわけにはいかない。日本人にとって、歴史的文化的経緯からしても逃れようのない事実である。ただ社会構造を規定する文化要素の分野は個性（キャラクター）・集団などにより変化するから、中国社会と中国人にいつもそのまま直接当てはまることにはならない。日本人と日本社会についても同様のことが言える。将来的に中国社会と中国人も根本的な変貌を遂げるかもしれない。ただそうなるには社会内部で変容の「必要性」が高まったときである。

現在のように、「ヒト」・「モノ」・「カネ」・「ジョウホウ」の国際移動が日常茶飯事な時代、悠長に根本的な変化を待っていることは不毛である。相互理解する一番簡単な方法は、やはり「ヒト」のつながりに重きを置くことであろう。個人個人ができるだけ多くの「好朋友」と「老朋友」を持ち合うことである。もちろん「ヒト」と「ヒト」とのつながりには不確実性がある。だが不確実性があるからこそ、相手社会への探究への欲望がかき立てられ解釈し理解しようとする面白みも生まれるのである¹⁾。

[附記] 本稿は 2010 年 11 月 27 日に立命館大学孔子学院で行った中国理解講座（第 53 回）の講演内容（『「排隊」現象から中国社会を観察する』）を基礎に作成した。聴講生の皆様には貴重なご意見を述べて頂いた。ここに感謝の意を表したい。

主要参考文献

1. 内山完造『中国人の生活風景 内山完造漫語』（東方書店・1979 年）
2. 園田茂人『中国人の心理と行動』（NHKBOOKS 908・2001 年）
3. 竹内実『中国 欲望の中国学』（蒼々社・2004 年）
4. 竹内実『新版 中国の思想 伝統と現代』（NHKBOOKS 851・1999 年）
5. ロイド・E・イーストマン 上田信 深尾葉子訳『中国の社会』（平凡社・1994 年）

1) 本論で述べる中国人という概念は一応漢民族を指すことにする。最近では少数民族にも漢民族の社会習慣が受容されつつあり、漢化されていると言われるが、本論ではそうした少数民族の動向には注意を払わないことにする。

2) 中国に関する問題を考えるにあたり、我々日本人がまず最初に認識しておくべきことは、日本と中国は「一衣帯水」だが「似て非なること」が多いという姿勢である。中国語学習においても、漢字を使用しているから簡単だと考える初級学習者がいることも同じような事例である。相違を強調しておけば、最近やけに多いネガティブな中国報道を見聞きして、些細なことで立腹して感情論に走ることもなくなるだろう。もう一つ中国という存在に対しての私見であるが、中国全体をくまなく理解可能な方法論を提示することは大変な困難が伴うと考えている。その理由は、中国という対象が、あまりにも広大で人口も膨大であり、悠久の歴史と文化を身にまとっているからである。そして日本は過去、中国王朝から多大な伝統文化要素を受容してきたことも忘れるべきではない。

3) こうした窓口は現在は消滅して存在しない。けれども、北京の日中友好医院には正面の普通の受付とは別に「国際受診受付窓口」が存在しており、外国人はこちらから受付をする。もちろん、中国人でも富裕層は「国際受診受付窓口」を利用する。一昔前は外国人＝金持ちだから特権を与えていたが、現在は同じ人民間で二極化が進んでいる。これについては、ケース 4 を参照のこと。

4) 中国銀行が 1980 年から発行した人民元と同等価値の証明書。外国人は出国時に両替時の証明書を提示すれば一定額は外貨に戻すことができた。外国人は兌換券の持ち出しは許可されていたが、人民元の国外持ち出しは禁止されていた。外国為替管理体制改革で 1993 年末で新規発行が停止となり、95 年 1 月から市場での流通も停止された（天兒慧等編『岩波 現代中国事典』岩波書店・1999 年、88 頁）。

5) ただし、この結末は果たして中国人が 20 年前よりも進歩して、平然と「排隊」できるようになっ

たのかと言えるかどうかは疑問なのである。上海万博の報道では、殺到する人民の姿が大きく取り上げられていたし、我先に行動する姿勢は他の各所でもまだ見受けられる。これを中国人の性質に帰するのか、制度によってそのようにさせられているのか、どちらがより正確に中国社会を現すのかを考えると、より一層興味深い。

6) この国民皆保険制度に関する論考の一つに、王文亮「中国版「国民皆保険・皆年金－胡錦濤政権が成し遂げたい最後の偉業」(『東亜』No.533 2011 11月号、22－32頁)がある。

7) 今年になり、幼児が交通事故に遭って道路で惹かれたまま放置された事件が、中国国内で大きく取り上げられた。そばを通り過ぎた一人は、なぜ、助けなかったのかという質問に対して、「気が付かなかった」と答えていた。日本人ならば嘘ではないかと疑うだろうが、中国の他人を気にしない社会状況では大いにありうる。

8) 内山完造『中国人の生活風景 内山完造漫語』(東方書店・1979年)、84－87頁。

9) 「車両不具合把握し開業」、「安全より面子優先か」(『朝日新聞』2011年10月2日)。

10) かつて日本の住宅が備えていた縁側はフェジイな空間で、外でも内でもない中間的コミュニケーションの場だった。筆者の幼少時には、隣近所の人が訪ねてくると、お茶とお菓子か自家製の漬け物を出し、縁側に座って談笑するのが日常の風景だった。現在のように気密性の高い高性能住宅ではデッキやテラスを備えている居宅は多くても、縁側的な部分は消滅してしまった。ゆえに井戸端会議は立ち話にその形を変えたのかもしれない。

11) 最近ではプライベートやプライバシーが重視されている。極力、土足で相手の内面に踏み込もうとするのを避けようとするという意識の結果である。特に、昨今の若者に顕著な傾向である。お互いに相手を傷つけないように配慮するのである。一見、他人への無関心とも解釈できるが、他人との距離を置く日本人的な「優しさ」とも理解できる。ただし、他人に「無関心」になる社会の風潮は「無縁社会」として社会問題化したこともあった(2010年12月15日放送『相棒 season9』第8話「ボーダーライン」等)。今年中国でも、老人の孤独死が上海で発生し、息子が断罪された。新興住宅地では日本と同じように、近隣との人間関係が希薄になっていることも一因である。

12) 「排隊」をキーワードにした新しい研究テーマの例を挙げておく。

1. 「孔子は排隊したことがあるのか否か」、孔子は各国を遊説して自説を政治に採用してもらおうとしていたから、必ずどこかの国で「排隊」して王に拝謁する時間待ちをしたはずである。『論語』等に残されたエピソードから、孔子は中国社会をどのように観察、分析していたのだろうかという疑問を分析する。

2. 「人民元の肖像画が四人の建国の元勳(毛沢東・朱徳・周恩来・劉少奇)から毛沢東一人に変わった意味」、政治的意図だけなのか、経済発展と関わっているのか、それともまったく別の理由なのか。100元札が登場した1980年時点では四人が「排隊」していた。ところが、2005年、建国50周年を記念し第5版セットの発行が開始され、毛沢東の肖像が単独使用されるようになった。